

## 『アメリカ 暴力の世紀』

2018年02月01日

米国のアイゼンハワー大統領（在任 1953年～1961年）は退任の時、軍産複合体が巨大な権益によって影響力を強め、政治家が動かせない状況にあると警告した。実際には、ますます軍と産業の密着度は増し続けて来た。第二次世界大戦後、米国はアジア、アフリカ、中東、そしてラテンアメリカにおいて、戦争と武力紛争を起し続けているのが実態である。米国は自衛戦争と見なしたが、経済が戦争に依存しているという面がある。安倍晋三首相は、日米は100%共にあると言っているが、米国と共にあることは、米国の戦争に巻き込まれるということである。米国が起す戦争と一体化すると、戦争による死者を出さなかった日本に犠牲者が出るし、世界からも非難されることは避けられない。日本は米国から自立し、世界平和を構築する構想と実践を模索すべきだと、切に思う。

米国の歴史学者ジョン・W・ダワーは『敗北を抱きしめて』を著わし、焦土と化した日本で復興に向かう民衆の姿と米国との関係、日本人の精神構造などを分析し、自由と民主主義が屈折、歪曲した形を生み出した実態を描き、ピューリッツァー賞を授賞し、ベストセラーになった。今回、ダワーは『アメリカ 暴力の世紀』を著わし、第二次世界大戦後の米国政治の実態を歴史資料に基づいて書いている。一言でいえば、「暴力」である。

本書は、オバマ政権の最終期に書かれ、トランプ政権については何も述べていない。「日本語版への序文」でトランプ大統領について書き加えている。彼は民主主義、人権や市民権の擁護、規則に則った世界秩序、多国間で協力し合う国際主義などは軽蔑すべきことと見なし、「アメリカファースト」一点張りである。彼において、脅威になるのは温暖化に伴う「気候変動」と核兵器の「現代化」の二つであると言っている。日本政府はワシントンから発令される政策に対し自主的、実質的な批判を述べることはなかった。従属と追従に変化が起こることはない。それどころか、トランプ政権の思慮不足で好戦的な軍事戦略に、積極的に貢献するようにとの圧力を強く受けるようになるであろうと、警告している。

米国は大戦後、東西冷戦を迎え、共産圏との核兵器をはじめ、軍拡競争に煽られた。代理戦争と言われる戦争、紛争も多発した。朝鮮戦争では日本に投下した爆弾量の4倍を超えたが、休戦に持ち込まれた。ベトナム戦争では日本に投下した爆弾量の40倍以上だったが、敗戦した。湾岸戦争は「コンピューター戦争」と言われ、ハイテク武器で勝利し、ベトナム敗戦症候群を乗り越えようとした。9・11同時多発テロは、米国が攻撃されたケースで、激怒した米国は「テロとの戦争」として位置づけ、アフガニスタン、イラクに侵攻した。新兵器をつぎ込んだが、敵の見えない戦いに消耗し、撤退を余儀なくされた。米兵の死者数は6,800人を少し上回るが、アフガニスタン・イラク側は130万人にのぼるといふ。現代の戦争には勝者はなく、莫大な犠牲と損失を与え、戦争のトラウマに侵されている人々、多くの難民たち、そして、新たなテロを生み出すだけである。

米国の軍事費は世界の主たる国々の軍事予算を合計したものを超え、中央情報局と国防総省による秘密作戦が140ヶ国で実施され、800ヶ所もの海外軍事基地を有している。本書によると、大戦後から2002年までに、米国は262回の戦闘行為を行い、非倫理的な暴力行使で、世界各地で死と苦難をもたらしている。米国の暴力は過度の傲慢と深刻な被害妄想の産物であると指摘している。また、戦争は政策や戦略の問題ではなく、残虐非道な行為を遂行する社会全体の「文化」の問題として捉える必要があるという主旨に深く賛同する。憲法を改定し、戦争のできる国にしようとしている現在、軍産共同の「戦争文化国家」にしてはならないという思いへと、『アメリカ 暴力の世紀』は語りかけている。